

INTERVIEW

一般社団法人日本家族計画協会 理事長
北村邦夫 先生



日本の リプロダクティブ・ヘルス 啓発活動のリーダーとして

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

自治医大で4つの1番

山田隆司(聞き手) 今日、日本家族計画協会(新宿区市ヶ谷)に理事長の北村邦夫先生をお訪ねしました。北村先生は自治医科大学1期生で、学生時代からすでにいろいろな面で目立っておられました。そんな学生時代も含めて、また、今コロナ禍の状況で、今月の「月刊地域医学」の特集が「コロナ禍のウイメンズヘルス」でもありますので、先生のご専門についてお話を伺いたいと思います。

北村邦夫 自治医大1期生は「僕の前に道はない」などと言っていましたからね(笑)。そういう意味では、私が自治医大で1番を取ったものが4つあって、最初の1番は学生結婚したことです。

山田 何年生のときに結婚されたのですか。

北村 2年生です。学生時代に弁当持って行って昼食を教室で食べていたのは私くらいでしたね。

まず、結婚したのが1番。そして結婚したので寮を出ました。それも1番です。自治医大は全寮制を前提にしていたので、どうしたものかと教授会が開かれたそうですよ。結婚という基本的人権を否定することはできない。その際に全寮制も現実的ではないということになったということです。そして3つ目の1番は子どもを持ったことです。学生のうちに2人目も生まれました。それが4つ目の1番です。卒業式の時に、長男はもう2歳でしゃべれるようになっていたので、体育館で「1025、北村邦夫」と読み上げられたときに、2階から大きい声で「おとうさん！」

と声をかけてくれました。

山田 それは和やかな卒業式でしたね。

北村 寮を出てからは下野市小金井のアパートに引っ越しました。そこでアパートの住人や周辺の人を集めて『自分たちで健康を守る会』というのを組織しました。自治医大には高久史磨先生をはじめ、東京大学から錚々たる教授陣が赴任していたので、講演会を開いて無料で講師をお願いしたりしました。

山田 大学時代に特筆すべきことがありましたか。

北村 私は実は高校時代にモルモン教徒になったのですね。きっかけは英語の勉強でしたが、大学に入って間もなくモルモン教の小山支部長になりました。教会活動の中に「2分半の話」というのがあって、日曜ごとに順繰りに「私は今週こういうことをしました。そして神様に助けられました」といったような信仰の証が会員に求められたのですね。2分半で話をまとめるというのはとても難しいです。そういう講話を学生時代に続けてきたことが、私の今の講演会活動に間違いなくつながっています。

山田 先生は、人とコミュニケーションを取ったり、サークルのような枠組みをつくっていくのが上手で、それが今にも活かしているのですね。

北村 おっしゃる通りです。そして教会活動という

のは地域活動でもあり、その流れの中で『自分たちで健康を守る会』を始めました。ちょうどその頃、全国的に健康づくり運動といったことが盛り上がってきたこともあり、自治医大生としてできることを考えたのですね。自分がスポークスマンの役割とっていました。

その会が栃木新聞や下野新聞で「自治医大生動く」と大書され、新聞に載ったことでテレビやラジオでも取り上げられて、私が住んでいたアパートの大家さんの野口長右エ門さんに『自分たちで健康を守る会』の会長をお願いしていたのですが、野口さんが一躍『時の人』となります。そんなことがきっかけだったのか野口さんが「一軒家が空いたから、それを使いなさい」と言ってくれたのですね。家賃はそのままいいからと、小金井の大きな一軒家で庭付きですよ。そこで、私は後輩たちを講師に使って塾を開いたりしました。

山田 そういえば塾をしていましたよね(笑)。

北村 『自分たちで健康を守る会』というのは結構インパクトがあって、自治医大生だけではなく、国分寺町も有名になりました。学生時代から面白いことをしていましたね。そういうことが私の人生の支えになっているとも言えます。

二人の師に導かれて

山田 卒業してからはどうされたのですか。学生時代から、産婦人科の仕事を考えていたのですか。

北村 私は群馬県の出身ですが、群馬大学医学部産婦人科教授だった松本清一先生が、自治医大病院の初代病院長に就任されたことから深いつながりができました。そんなことがきっかけとなっ

て、松本先生が自治医大で行っていた思春期クリニックのベシユライバーの役割をさせてもらっていました。いわゆる教授のお手伝い、筆記役みたいなものですね。病院長室に入り浸ってコーヒーをご馳走になったりもしていました。

山田 当時は学長も教授たちも学生に対して大変フレンドリーでしたよね。教授の自宅で食事をも